

近世期における鉱山開発と中津川村

原田洋一郎

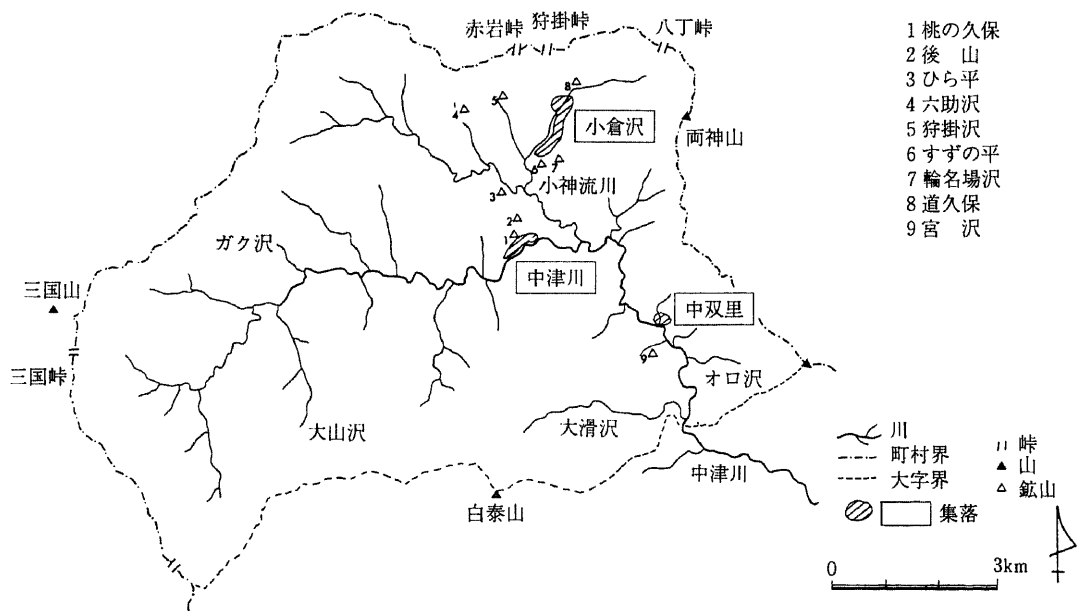
I はじめに

秩父郡大滝村中津川地区は、荒川の源流のひとつである中津川上流域に位置している。周囲を両神山、白泰山など1000mを超す高山に囲まれ、村域の大部分は山林である。このため、集落は川沿いの斜面にごくわずかな部分を占めるに過ぎない。隔絶性の高い地域に立地した当地区は、明治22年(1889)に合併して大滝村の一大字になるまで、単独で一村を為していた。現在、当地区内には小倉沢・中津川・中双里の3集落がある。このうち、近世の中津川村を構成していたのは、中津川とその枝郷中双里であり、小倉沢は近代以降に成立した鉱山集落であった¹⁾。

小倉沢集落が成立したことによって明らかなように、中津川地区は地内に鉱山を有している。中

津川付近の地質は、古生層とこれに貫入する石英閃緑岩によって構成されているが、石英閃緑岩と接触する古生層の石灰岩中には鉱床が存在する²⁾。この地域においては、岩盤が堅く、鉱石は硫黄分を多く含んでいたため、採鉱、精錬が容易ではなく、本格的な開発は昭和12年(1937)の日窒鉱業の参入を待たねばならなかった。しかし、第1図に示したような鉱山が近世期には既に発見され、開発された歴史を有していた。

近世期の中津川村地内には、鉱山集落は成立していなかった。周囲から隔絶されたこの地域において行われた鉱山開発には、中津川村の村民が深く関わったと考えられる。この報告では、近世期の中津川村民がどのような集落を形成、維持してきたか、また、近世期の鉱山開発にどのように関わり、いかなる影響を鉱山開発から被ったかを明



第1図 対象地域の概要
(鉱山の位置は富岡政治氏の御教示による)

らかにしたい。

なお、鉾山開発に関する記述にあたっては、中津川地区の旧家、幸嶋家に所蔵されている「鉛山記録」³⁾を中心的な史料とした。文中における鉾山関係の記述のうち、特に注記がないものは「鉛山記録」によるものである。

II 慶長期以前の鉾山業と集落の形成

1) 中津川村における鉾山業の成立

中津川村の成立、あるいは近世以前の鉾山業について明確に記した史料の存在は知られていない。しかし、少なくとも戦国期以前において、この地域で鉾山業が営まれていたこと、中津川村の居住者が鉾山業に関わったことを窺わせる状況証拠や伝説が存在する。

武甲山、三峰山、両神山をはじめとして、秩父地域には数多くの修験の行場がある。修験者は中世期までは各地の鉾山を廻り、そこで指導者的な役割を果たした存在であった⁴⁾。修験者の存在は、秩父地域に良好な鉾山があり、中世期に採鉾が行われていたことを示唆するものである。両神山への登山口のひとつである白井差は、元禄11年(1698)までは中津川村の枝郷であった。ここを根拠地に活動した修験者が、中津川での採鉾に間接的に関わっていたことが考えられる。

天正3年(1575)に甲州の武田氏が滅亡した後、その残党が峠を越えて秩父地域に流入し、大滝村栃本の股の沢、真の沢、小荒川、そして中津川において砂金採取を行ったという伝説がある⁵⁾。中津川集落南部には「金山沢」と呼ばれる沢があるが、この沢が、白泰山を越えて栃本へ到る山道の途上にあることは、この伝説との関連を想起させる。

ところで、近世期に中津川村の名主を世襲した幸嶋家と逸見家は、共に他所から移住してきたことを伝承している。しかも、両家ともに近世初頭の鉾山開発に関わったとされている。近世期に村の指導者的な立場にあった両家がこのような伝承を携えていることは、中津川村の成立が鉾山開発

に関連したことを示唆しているといえよう。

逸見家は天文13年(1544)に中津川に土着したことが伝えられている⁶⁾。秩父地域の各所に多く分布している逸見氏は、先祖が武田家の重臣であったという伝承を持っている場合が多い⁷⁾。中津川の逸見家も、甲斐源氏の系譜をひくとされている。また、「新編武蔵風土記稿」には、逸見家の祖先が慶長期に鉾山開発を営んだことが記載されている。一方の幸嶋家は、元久2年(1205)に下総国猿島郡から流入してきた幸嶋覚範入道を先祖に持つと伝えられている。「鉛山記録」では、中津川山内において職人を用いて採鉾にあたってきた家柄であったとされる。

中津川における最も古い採鉾の記録は、「慶長十三、十四年等は字桃の久保高根迄数ヶ所にて大金堀出し大盛也中にも麓の間歩壺荷二付砂金九分掛り大直り」というものである。ここにみられる「桃の久保」は現在も地字名として残る。「高根」は、現在の「高嶺」と考えられる。この記録からは「桃の久保」の沢沿いの各所で採鉾が行われた様子を知ることができる。また「堀出し」「間歩」といった表現が用いられていることから、慶長期の採鉾には、坑道掘りの技術が用いられていたようである⁸⁾。

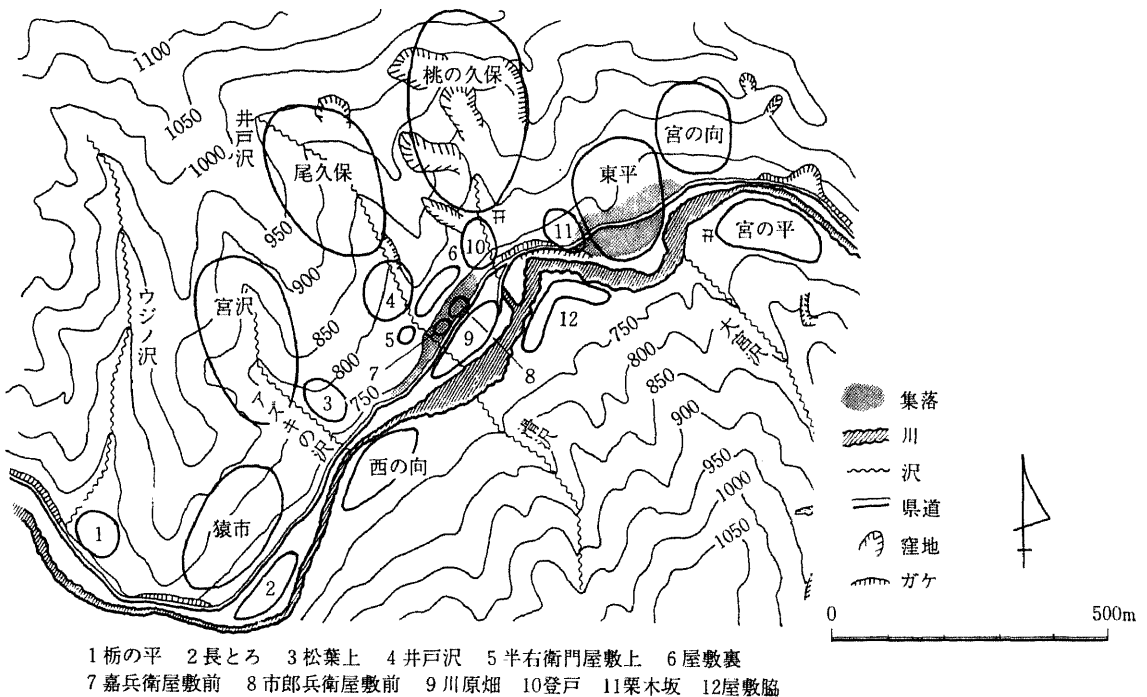
この桃の久保金山は、間もなく湛水のために廃坑を余儀なくされた。そこで排水のための水抜きを付設することが試みられたが、資金不足のため、工事は頓挫してしまった。その後、正徳元年(1711)まで、鉾山に関する記述は途絶する。近世初期には重要な金属鉾山は幕府の直轄地とされ、口留番所などを設けて統轄されたものであるが、現在のところ、中津川においてそのような番所は確認されていない。短期の稼行の後、中津川の鉾山は衰えたと考えられる。

2) 金山衰微後における中津川集落の景観

この節では、近世初期の金山衰微後における中津川の集落がどのように成立していたかについて、集落の景観やこれを取り巻く耕地や山林の分布と利用を通して記述する⁹⁾。

元禄検地の水帳¹⁰⁾に記載された地字の内、確認できるものを現在の景観上に示した第2図によれば、「桃の久保沢」の西側に、「屋敷前」「屋敷裏」などの屋敷地名があった。このことは、中世期には既にこの地に屋敷が立地していたことを示している。現在この周辺には、空き家を含めて10軒の家屋があり、「西平」と称されている。「西平」の最西端に位置する家は「オオニシ」の屋号を持ち、東端の家は「ヒガシ」の屋号を持つ。家屋は県道よりも3～5m上方にある旧道に沿って立ち並んでいる(写真1)。ここには井戸を持つ家屋はなく、村営の水道が引かれるまでは、アヅキの沢や井戸沢といった、付近の沢から汲み、または引いた水を利用して、「桃の久保沢」の東側にも、現在は公民館や県有林事務所を含む24軒の家屋がある。検地時におけるこの地字は、大部分が「東平」であり、現在も「東平」と呼ばれている。ここでは、家屋は県道よりも下方に多く分布する。

「西平」の家屋の前を通ってきた旧道は、「東平」の西端に位置する旧名主の幸嶋家の家屋の脇から下方に降り、川を渡って諏訪神社へ向かっている。集落付近の川の水量は少なく、古老の話では、台風の際に川縁の畑が水をかぶったことはあったが、家屋が被害を受けたような記憶はないという。「東平」には、井戸を持つ家が3軒あり、それぞれ「オオエ」「オマエ」「シタデ」という屋号を持ち、他に比べると広い屋敷地を有する。「オマエ」の屋号を持つ幸嶋家は、以前は西平にあったと伝えられている。これらのことは、「西平」への集落立地が、「東平」に先行したことを示唆している。また、現在はキャンプ場として利用されている桃の久保沢対岸の低地には、検地時には14筆の中畑があり、「屋敷の脇」という地字名が付されていた。ここは北向き斜面であるが、地名からは、中世期にはここにも屋敷があったことが推察される。集落の周辺には、わずかな耕地が広がっている。



第2図 中津川集落周辺における検地帳記載地名の分布

(山中梅次氏所蔵「中津川村検地水帳」に記載されている地字名を、幸島敬一氏所蔵「寛政三年中津川村絵図」および聞き取りによって比定)



写真1 中津川西平集落の家屋と旧道
(1990年11月 撮影)

元禄検地によって検出された中津川村の反別は、9町5反7畝5歩であった。この内、耕地は中畑1町3反8畝9歩、下畑6反2畝9歩、下々畑が7町2反4畝15歩、そして、上木畑¹¹⁾が1反10歩であった。これらの石盛は、中畑が3斗(永60文)、下畑が2斗(永40文)、下々畑が5升(永10文)と定められた。上木畑の石盛は下々畑と同じとされた。上木は上木畑以外にも作付され、1束に付き、2升5斗(永5文)とされた。

第1表によれば、中畑は「屋敷の脇」、「屋敷裏」、「東平」、「川原畑」などの集落付近の斜面に多く分布していたことがわかる。下々畑は、桃の久保沢沿いの「桃の久保」、井戸沢沿いの「尾久保」、現在はアヅキの沢と呼ばれている沢沿いの「宮沢」など、沢に面した窪地に多く分布していた。下畑の石盛は下々畑の4倍と、格差が大きいため、下々畑の生産力はかなり低く見積られていたことがわかる。「桃の久保」では、検地で検出された下々畑が近世期末に百姓持ち林となった事例があった¹²⁾。現在は山林となっているが、聞き取りによれば、「桃の久保」では昭和30年(1955)頃には焼畑耕作が行われていた。下々畑の石盛が著しく低いのは、焼畑耕作に伴う休耕の期間が考慮されていたものであろう。

中津川集落付近の土地利用を、第3図に模式的に表した。「西平」の土地利用を表した(a)によれば、家屋が斜面の比較的高い部分に位置している

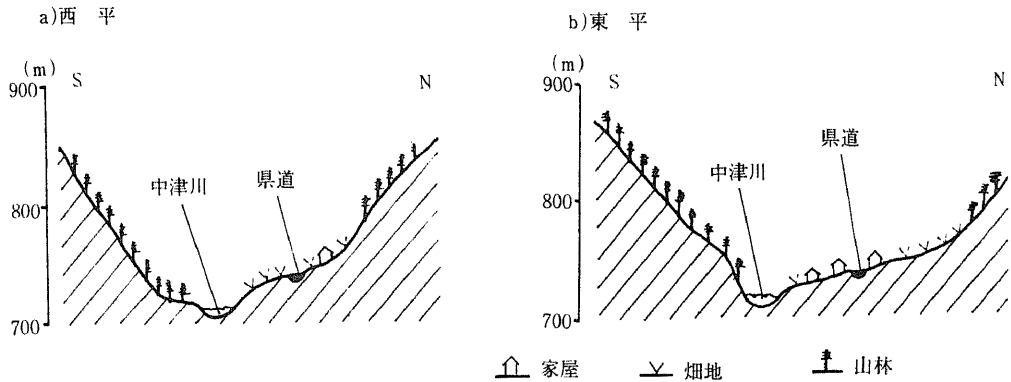
第1表 集落付近の地字ごとの耕地分布
(元禄10年)

地 字	中 畑	下 畑	下々畑	上木畑
宮 の 向	0筆	2筆	11筆	1筆
宮 の 平	2	9	0	0
宮 沢	0	0	12	0
市郎兵衛屋敷前	2	0	0	0
西 の 向	0	4	5	0
川 原 畑	3	3	1	0
東 平	5	9	2	0
桃 の 久 保	0	2	12	0
半右衛門屋敷前	0	0	2	0
尾 久 保	0	0	14	0
猿 市	0	2	16	0
屋 敷 の 脇	14	0	0	0
屋 敷 前	6	0	0	0
屋 敷 裏	10	0	0	0
嘉兵衛屋敷前	3	2	0	0

資料：「中津川村検地水帳」
(大滝村中津川山中梅次氏所蔵)

こともあって、家屋群の上方の畑地の広がりは大きくない。ここでは、畑地は家屋群の下方に広がっている。これらが検地帳にみられる「川原畑」や「嘉兵衛屋敷前」などであった。「東平」を示した(b)図によれば、家屋群の上方、標高800m 辺りまでが畑地として利用されていることがわかる。検地帳記載の「東平」、「宮の向」はこのような位置にある。現在の景観では、これらの場所の畑地の1枚1枚は横長の長方形に区切られ、周囲を石垣で囲まれている(写真2)。

第4図には、検地帳に記載された名請人ごとの所有面積を耕地と屋敷地とにわけて示した。村内の耕地が少ないため、各人の所有耕地は極めて少ない。そして、所左衛門(幸嶋家)、嘉兵衛(逸見家)の所有耕地面積が他と比べて突出していた。しかも、事実上の常畑であったと考えられる中畑、下畑の3分の1は、所左衛門によって占められており、嘉兵衛も多くの中畑、下畑を所有していた。このため、他の名請人の中には5畝以上の耕地を持つ者はいない上に、所有耕地の過半は下々畑で占められた例が多い。



第3図 中津川集落付近の土地利用模式図

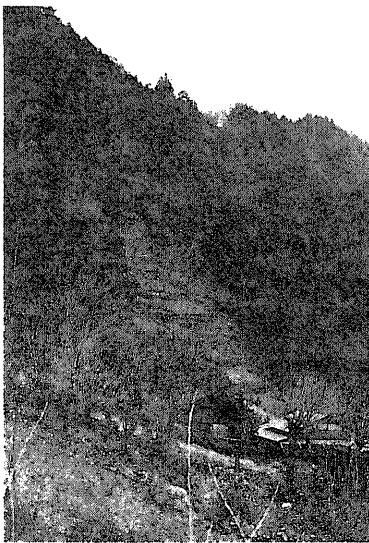


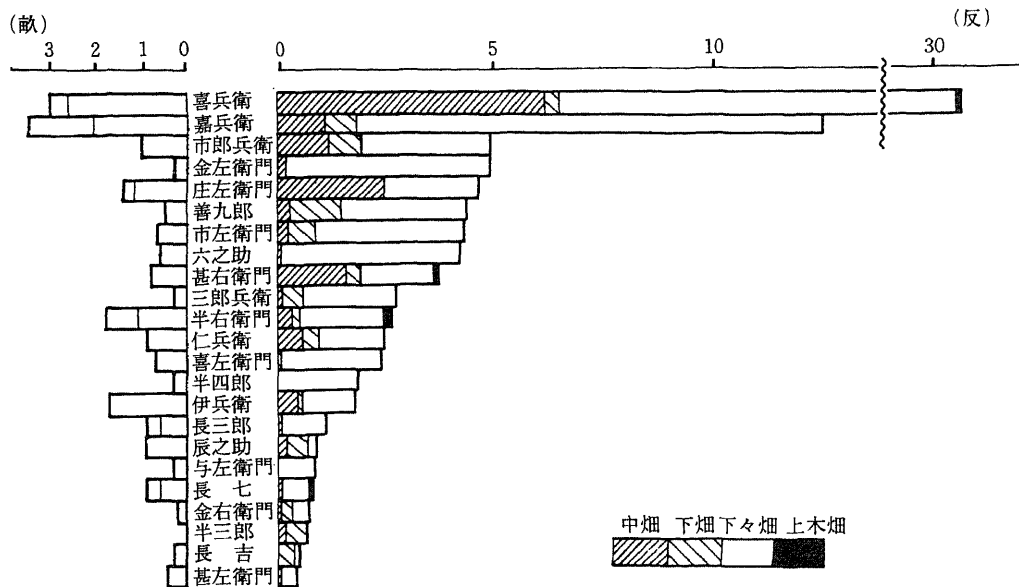
写真2 字「宮の向」における斜面を利用した畑地
(1990年11月 撮影)

検地帳に記された屋敷地は28ヶ所であった。この面積にも、所左衛門と嘉兵衛の突出がみられる。しかし、1筆の面積は最も大きいものでも2畝21歩と小さい。1畝に満たない屋敷地を持つものが多い。斜面上に立地した集落であることから、屋敷地は小さくならざるを得なかったと思われる。所有耕地と屋敷地の広狭に明確な相関関係はみられないが、中畑を多く所有したものが相対的に大きな屋敷地をもっていたという傾向を指摘することができる。

耕地そのものが少ないため、耕地の多少をもって、この村の経済的階層構成について考えることは適当ではないであろう。しかし、名主と他の村民との間に、かくのごとき所有耕地や屋敷地の広さの格差があったことは、名主の2家が大きな指導力を持っていたことを示していると思われる。

中津川村地内の大部分は山林によって占められていた。このうち、「ガク沢」と「大山沢」を結んだ線から西側の一帯は幕府の「御林」であり、その他は共有林である「百姓稼山」であった。「百姓稼山」の大部分は、中津川1ヶ村の共有林であったが、「ヲロ沢」、「大滑沢」付近は、新古大瀧村との3ヶ村共有林であった(沢の位置については第1図参照)。「御林」の利用は基本的に認められなかったが、「百姓稼山」は、村民の自由な利用に任せられ、林産物の採取、加工や焼畑耕作に用いられた。

この利用に関して、「鉛山文書」には、「(「百姓稼山」において)桧見付ル人ハ、其者勝手ニ挽板等之稼取、岩茸見当候者ハ、其者自由ニ取之、作物仕附場所見立候得者、差を切ると申切、開山畑拵へ、菜畠に可成処見付候人者、其者所持之積切替畑ト号、外人手入不致、見立人ニ限所持」と書かれているが、実際には、村内で利用に関するいくつかの取り決めが為されていた。享保18年(1733)の「中津川御山内之儀ニ付被仰渡候趣請書覚」¹³⁾によって、この取り決めについて知ることができ



第4図 中津川村における元禄検地名請人別の所有耕地・屋敷面積
(山中梅次氏所蔵「中津川村検地水帳」より作成)

第2表 中津川村の稼山において生産が
許可された品目(享保18年)

品 目	長 さ	原 木
挽 板	3～6(尺)	桂・沢栗・樅・榎
笹 板	1.8～1.9(尺)	樅・榎
羽 子 板		檜・桂・樅・姫子
桶 木	1～2.5(尺)	檜・樅
木 地 挽		杉・榎
木 地 挽 物		杉・榎
鞘 木		朴
岩 茸		
白 箸		水草・川くるみ

資料：幸島敬一家所蔵「中津川御山内之儀ニ付
被仰渡候趣御請書覚」

る。山稼ぎ品目とその規格は第2表のように定められた。これらは従来の利用を追認したものであるが、これ以降は他の品目を稼ぐことや、規格を変更することは禁止された。山稼ぎ品の搬出経路は次のように決められていた。また、他村の者を山内に入り込ませることは禁止された。

稼山之木品山出し致候義大瀧・賛川之方白井差ハ同

郡小森村江山出致し、右之外之場所へ一切山出シ不仕候旨書付差出シ候ニ付、自今も右両口江者可差出候、信州・甲州其外他村へ出し候か又ハ他村之者ト山稼駢合御山内江入込セ候義茂有之ハ急度咎可被仰付旨奉畏候

「百姓稼山」の利用に対しては、1貫66文の山役銭が賦課されたが、これは、30名と定められていた百姓株の所持者によって、頭割りに負担された。また、ここの立木を他村者に売り渡した際にも、その代金を30等分に分配した¹⁴⁾。

このように、「百姓稼山」の利用は耕地の極めて少ない中津川村の村民が生計を支える上で、非常に重要であった。このような共有地が村民の経済的基盤となっていたことは、共有地を紐帯として、村の結び付きが強かったことを窺わせる。

Ⅲ 鉱山開発の再開と山稼ぎの展開

1) 中津川村地内における鉱山開発の再開

正徳元年(1711)と元文5年(1740)に、水没していた桃の久保本舗に排水工事が施されたが、この

時期の技術では、金山の復活は叶わなかった。正徳の排水工事を行ったのは、秩父郡影森村の新井重左衛門、元文の工事を行ったのは、江戸本所わくや藤右衛門の名代、会津出身の新井弥市であり、いずれも中津川村外の出身者であった。

元文期の再開発には幕府の関与があった。寛保3年(1743)に中津川村民が、金山の開発のために村内に入り込んだ職人との間に騒動を起こさないことを誓約した文書を名主に差し出したが、この文書では金山開発を「先達而被仰付候金山御用」と表現している¹⁵⁾。时期的にみて、これは元文期の再開発を指すものと思われる。当時の代官であった大谷奎之助によって、工事を行った新井忠左衛門へ工事資金が貸し付けられたことも、その裏付けとなるであろう。

元文期前後には、全国の主要鉱山における金銀銅など鉱物の生産量は、軒並減少していたため、幕府は鉱山における生産物の処理を厳重に統制する政策をとるようになった。あわせて鉱山の積極的な開発の奨励も行われた¹⁶⁾。かつて大量に金などを産出した桃の久保金山の再開発に幕府が関与したことは、そのような時代の趨勢を反映した動きであった。

明和2年(1765)には、平賀源内による桃の久保金山の再開発が始まった。武蔵国那賀郡猪俣村(現児玉郡美里町域)の長百姓中嶋利兵衛が資金面での協力者となり、鉱山の試掘にあたって代官所へ提出する問掘願いは、両者の連名で提出された¹⁷⁾。金山は、翌明和3年から明和5年まで稼行された。

金山の稼行中には、幕府から役人が派遣され、常駐させられた。幕府の積極的な開発への関与が窺われる。しかし、元文期の事例とは異なり、幕府は開発資金を鉱山へ直接下付してはいない。この時期には、幕府は民間の資金による開発を奨励し、運上を得ようとしていたことが窺われる。

安永2年(1773)からは、鉄山の開発が始まった。この事業も平賀源内によって推進された。「鉛山記録」には鉄山事業の開始について「安永2年岩田三郎兵衛幸十郎等入山夫々普請取掛小屋等出

来」とある。幸十郎については不明であるが、岩田三郎兵衛は、秩父郡久那村(現秩父市域)の材木商人であった。彼らがそれぞれ小屋を普請しているところをみると、鉄山の開発では、直接の経営は三郎兵衛のような商人等に任され、源内は見立人として、利潤の一部を得ていたと思われる¹⁸⁾。同年中に吹小屋が建設され、操業を開始した。しかし、当時の精錬技術では、良質の鉄を製することができず、翌安永3年に鉄山は休山した。

2) 中津川村民の鉱山開発参加

幕府の奨励を背景とした鉱山開発の影響を受けて、天明期から文化期にかけて次々と新しい鉱山が見立てられた。第3表にはこの時期から幕末にかけての鉱山開発の事例をまとめた。鉱山開発は、これまでの桃の久保に加えて、小神流川流域で行われるようになった(第1図参照)。また、秩父地方の出身者による開発の事例が多くみられる。この中には、喜兵衛をはじめ、繁八、松四郎など、中津川村民による開発も含まれていた。

中津川村の名主の1人であった喜兵衛(幸嶋家)は多くの鉱山開発に関わった。天明4年(1784)の桃の久保金山の再開発で、秩父郡薄村の太市とともに願人となったのを始め、同年10月の新金銀山の150日間の問掘願、天明4年12月の「輪名場沢」と、天明5年の「五平岩」の問掘願いをたて続けて提出した。

天明6年には、小神流川流域の銀鉛山の問掘が許可された。この内、「後山」の鉱山では大量の鉱石が掘り出された。この後、数度の継続願いが出され、寛政5年(1793)まで稼行した。上納は1年に付、永5貫目であった。なお、吹目銀は「御買上」と表現されていることから、幕府が買い上げたものであろう。

寛政13年(1801)の桃の久保金山の再開発には、喜兵衛の他に、もう1人の名主繁八も参加した。文化3年(1806)にも桃の久保金山の再開発が行われたが、この開発には、喜兵衛と繁八に加えて、秩父郡新大瀧村名主の源治、新大瀧村鶴平組の太郎兵衛、伴右衛門が参加し、問掘は連名で出願さ

第3表 中津川村地内の鉱山開発（天明2年～嘉永5年）

年	場 所(鉱物)	願 人	金 主
1782(天明2)	桃の久保(鉄) ?(銅)	?	
1784(天明4)	桃の久保(金) ?(金・銀) 輪名波沢(銀・鉛)	(八惣次(江戸八丁堀) 文次郎(江戸八丁堀) 喜兵衛 太市(秩父郡薄村) 喜兵衛 喜兵衛	
1785(天明5)	五平岩(銀・鉛)	喜兵衛	
1786(天明6)	後 山(銀・鉛)	喜兵衛	
1790(寛政2)	?(銀・鉛)	松四郎	
1801(寛政13)	桃の久保(金)	喜兵衛・繁八	
1806(文化3)	桃の久保(金)	喜兵衛・繁八 源治・太郎兵衛 (秩父郡薪大瀧村) 伴右衛門(秩父郡古大瀧村)	
1816(文化13)	桃の久保(金) 小神流川(銀)	藤右衛門	(若松屋長次郎(江戸神田) 山形屋庄次郎(江戸神田)
1819(文政2)	桃の久保(金) 小神流川(銀)	喜兵衛	(工藤太沖(信州上田) 飯島幾右衛門(?))
1820(文政3)	小神流川(銀・鉛)	佐右衛門	
1825(文政8)	ひら平(銀・鉛)	喜兵衛	(小池基助(江戸本所)高沢鉄五郎(江戸浅草) 宮原弥五兵衛(江戸湯島)桜井新助(江戸湯島) 直七(上州邑楽郡梅原村)
1828(文政11)	六助沢(銀・鉛) ひら平(銀・鉛)	茂市 金子三郎右衛門(上州川俣宿)	←
1839(天保10)	ひら平おとわ坑(銀・鉛)	喜兵衛	(炭屋平兵衛(江戸日本橋通油町)伊勢屋平作(江戸品川) 伊勢源次郎・水戸屋源右衛門(江戸森下町) 炭屋平兵衛・伊勢屋平作(江戸)
1843(天保14)	ひら平滝上・六助沢 (銀・鉛) ひら平滝下(銀・鉛)	喜兵衛 喜兵衛	川口幸蔵(江戸田町)
1845(弘化2)	狩掛沢(銀・鉛) 六助沢(銀・鉛) ひら平(銀・鉛)	正田利右衛門・喜平次 (野州佐野天明町) (炭屋平兵衛(江戸) 伊勢屋平作(江戸) (炭屋平兵衛(江戸) 伊勢屋平作(江戸)	← ← ←
1851(嘉永4)	すずの平他2ヶ所(鉛) 小倉沢(鉛)	中津川村村役人連名 中津川村村役人連名	炭屋平兵衛・伊勢屋平作(江戸) 正田利右衛門(野州佐野)
1852(嘉永5)	宮沢・大滑沢・小滑沢 ヲロ沢・深沢 (鉛) 宮沢 すずの沢(鉛)	市川半兵衛 (上州甘楽郡砥沢村) (市兵衛(江戸堀江町) 太兵衛(江戸浅草)	← ←

(幸島敬一氏所蔵「鉛山記録」、山中梅次氏所蔵諸文書より作成)

注：()内は出身地。記載が無い場合は中津川村民を示す。

金主の欄の←印は、金主が願人と同一人物であることを示す。

れた。資金はこれら5名の共同出資であった。前回中断した工事は今回完成し、採鉱に取り掛かったものの採算が合わずに休山した。

寛政2年(1790)には、中津川村百姓松四郎から銀鉛山の間掘願が出された。間掘にあたって松四郎と村の間に交わされた議定の内容から、鉱山経営者としての松四郎と、村との関係をみることができる¹⁹⁾。

当戊年(寛政2年)貴殿(松四郎)切替場所ニ而銀鉛ニ茂可相成哉之山色被見立候ニ付先達而御願被差出候由、願通百五拾日之間間掘被仰付候ハ、願人之身ニ付初願百五拾日之内ハ貴殿勝手次第第可被致答、御日限切候後ハ村中江対談之上御願差出并ニ地代等ハ村中相談ヲ以割合候答、勿論屯人立之御願等差出間敷答、尤先間掘中も人合之場所ニ付小や炭・薪・留木代金之儀ハ仕来之通惣村中江無甲乙割合候答

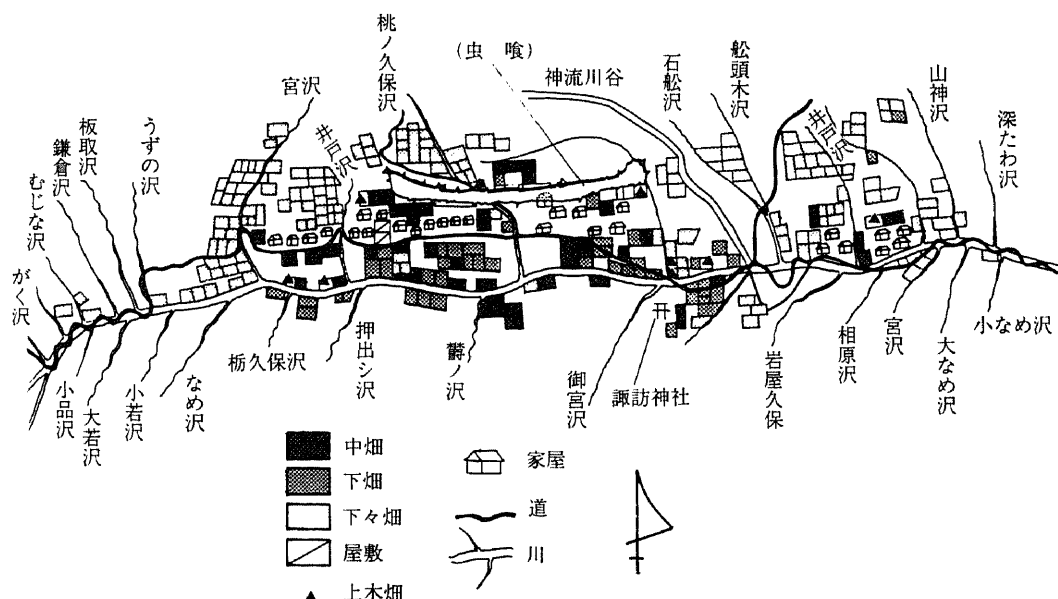
これによれば、松四郎は「願人」の立場であるから、許可された150日の間掘期間は自由に採鉱を行う権利を認められた。しかし、この場所は「百姓稼山」内であったので、鉱山稼行に必要な用地

や用木の代金は、村中に平等に分配されることになった。また、稼行継続の願いを提出する際は、村中で相談の上、共同で出願する取り決めであった。これに続く記録が他にみられないことから、この開発は失敗に終わったと思われる。この事例からは、鉱山開発も「百姓稼山」内で行われる限りは、村の規制を受けたことがわかる。

松四郎の家系はこの後、2度の鉱山開発に関わった。文政3年(1820)、小神流川流域の「六助沢」の銀鉛山の間掘を行った佐右衛門は松四郎の子であった。この六助沢の銀鉛山は、文政11年(1828)に佐右衛門の子である茂市によって、再び間掘が為された²⁰⁾。

3) 鉱山経営の背景としての山稼ぎの展開

第5図は、寛政3年(1791)の絵図²¹⁾に基づいて、集落付近の景観を示したものである。この絵図に描かれた事物の距離関係は実状と著しく異なるが、耕地、家屋ごとに所有者と反別が詳しく記入されている。これによれば、中双里集落には7軒、中津川集落には21軒の家屋がみられる。中津



第5図 寛政期における中津川村の耕地と家屋の分布
(幸島敬一氏所蔵「寛政三年中津川村絵図」より作成)

川集落の家屋は、「桃の久保沢」を中心に2分されており、少なくともこの頃には「東平」に家屋が立地していたことがわかる。集落付近に中畑、下畑が分布し、沢沿いに下々畑が分布しているという耕地の分布状況は、元禄10年(1697)の時点とほとんど変化がなかった。また、精錬施設や人足小屋など、鉱山業に関連する施設の存在は、絵図には認められない。「桃の久保」で行われた、かつての金山の再開発はすべて失敗に帰しているし、その他の鉱山開発は小神流川流域において行われたため、鉱山業の関連施設が集落周辺に立ち並ぶようなことはなかったのであろう。

天明期以降の鉱山開発に関わった村民の内、喜兵衛と繁八は世襲の名主であったことから、経済的に他の百姓よりも優越した立場にあったと思われる。しかし、その資金源が村内の耕地における生産物による収入であったと考えるには、耕地はあまりに少ない。まして、寛政2年(1790)の鉱山の開発者であった松四郎は持高1斗7升8合の小前百姓に過ぎなかった²²⁾。

松四郎は、鉱山開発に先立つ天明2年(1782)に信州佐久郡御所平村文蔵を相手取り、金100両余の貸し金が滞っているとして訴訟を起こしていた²³⁾。松四郎のような小前百姓がこのような経済力を持っていたことは、この時期の「百姓稼山」における山稼ぎの展開と無関係ではないであろう。

この時期には「百姓稼山」における山稼ぎ品目が増加し、これまでの大瀧・小森村筋への旧来の道筋とは別の新たな道筋を利用して搬出されるようになった。従来、稼山においては、第2表でみた品目の生産が認められていたが、天明期になると、許可された規格の拡大と品目の増加を求める嘆願が出された。天明6年(1786)にはこの嘆願が聞き入れられ、山稼ぎ品目は、新たに次のように定められた。

右は当村稼山之内ニ前々々八品之稼被仰付来り候
処本品茂不足ニ罷成、寸尺之儀茂先年御定ニ者不自
由ニ捌方不宜候間、此度本品并寸尺相増八色之外下

駄木・棒木・鳥糞(とりもち)稼之義新規御免相願御
年貢永之義も此度々四百五拾文相増奉願候処、御
伺之上願之通り御下知相済、勿論右本品寸尺ヲ以相稼
御年貢之儀式五百五拾五文宛之相納可申旨²⁴⁾

これまでは永1貫66文であった山役銭の額は、1貫450文が増永された結果、2貫516文(文書原文に従えば2貫515文)となった。年貢負担は倍増したことになるが、これを受け入れてなお、多くの品目を稼ぐ必要、あるいは有利性があったと考えられる。

寛政6年(1794)に、村中で山稼ぎに関する議定書が作成された。内容は従来からの仕来を改めて確認したもので、享保18年の御請書と同様に、許可された品目以外を稼がないこと、稼ぎ品の搬出は小森・大瀧の道筋を利用し、山出しで行うこと、そして川流しは行わないことなどが取り決められていた²⁵⁾。しかし、この議定の内容はこの時期の山稼ぎの実状に即応していなかったと考えられる。とりわけ、山稼ぎ品の搬出方法が問題となった。次にあげる2つの事例はこのことを示している。

寛政9年(1797)に、名主逸見家の嘉兵衛が、山稼ぎに関する議定違反である、川流しによる山稼ぎ品の搬出を行おうとして、喜兵衛らによって役所に訴えられた。嘉兵衛は、議定書には村中の印形が揃っていないため、議定の内容は無効であると抵抗した。

文化10年(1813)に、百姓佐右衛門(松四郎の子)と名主繁八との間に係争が引き起こされた。この年の4月に、佐右衛門が「百姓稼山」において製した鳥糞を出荷しようとしたところ、繁八がその荷物を差し留めたことを不当であるとして、佐右衛門と名主喜兵衛の忤藤右衛門の2名によって、代官所に訴訟が持ち込まれたのであった。繁八は、佐右衛門が小森・大瀧筋を通さず、赤岩峠を越えて河原沢村へ出そうとしたことが議定に違反するため、荷物を差し止めたと主張した。これに対し佐右衛門は、鳥糞は木材製品とはみなされず、規定外の道筋へ出荷してもよいと判断したと主張

した²⁶⁾。小森・大瀧筋以外への出荷は、佐右衛門に一方の名主が荷担していたことを考慮すると、佐右衛門ひとりの不正行為というよりは、村の中の勢力間の利害関係の対立と理解されるであろう。

Ⅳ 鉛鉱山の開発と鉛問屋の進出

1) 鉱山開発における金主の役割の増大

文政期以降の中津川村内の鉱山開発は、専ら小神流川流域を中心に行われた。従来の開発の中心であった桃の久保金山の開発は文化13年(1816)を最後に途絶した(第3表)。

開発対象地の移動に伴って、採鉱の対象は銀、鉛となった。開発の初期においては銀の含有量が比較的多い鉱石を採取することができたが、採鉱が進むに従って鉱石中の銀の含有量は低減していったようである。例えば、最初に小神流川流域で銀鉛山が開発された天明6年(1786)には鉛100匁(約375g)につき、12匁(約45g)の銀を得ることができたという。文政8年(1825)の銀鉛山問掘の際に銀の試し吹きを行ったところ、鉛1貫(約3.75kg)から得られた銀は2匁(7.5g)であった。これ以降は鉛の産出が目的とされるようになった。弘化2年(1845)には当時稼行中の3ヶ山のうち、ひら平と六助沢の2ヶ山における天保11年(1840)からこの年までの6年間の鉛の総産出高が約10,500貫(約39t)であったと報告されている。

また、この時期には、これらの開発に参画していた金主に実質的な経営が委ねられるようになり、喜兵衛を始めとする村内の山主は直接稼行に携わらず、金主から一定の権利金を得るのみになっていった。一連の銀鉛山開発の事例によって、その様子を見てみよう。

文政8年(1825)、喜兵衛によって小神流川流域のひら平の間掘願が出された。この時金主となったのは、江戸本所浜屋敷小池甚助・浅草東中町高沢鉄五郎・湯島5丁目宮原弥五兵衛・湯島天神下桜井新助の4名であった。これらの金主たちは、それぞれに職人を用意して稼行を行った²⁷⁾。稼

行にあたって、喜兵衛と金主の間には次のような議定が交わされた。

貴殿(喜兵衛) 御公儀様、日数百日間冥加永相附問掘御願立被成候処、自力、試掘相成兼候趣、付出金入用向御頼被成候、付、則我等連中差加り御入用出金一同出精仕往々御宝山、取立可申候、尤歩合之義者右山諸掛差引残儲徳分十、相立五人江割、貴殿、式分相渡八分我等連中へ割取可申候

このような関係は「鉛山記録」では、「内仲間同前、取極堀割いたし候」と記されている。共同で出金し、定められた割合で利潤を配分する取り決めであったことからわかるように、この事例では、金主と喜兵衛とは共同経営者の関係であった。

次に、文政11年(1828)に行われた2件の鉱山開発をみよう。ひら平の金主は、上州邑楽郡川俣宿金子三郎右衛門であった。三郎右衛門と喜兵衛の間に交わされた議定書では、三郎右衛門の肩書は「山引請人」とされた。幕府への冥加の上納は、金主であった三郎右衛門から為されていた。この事実、実質的な経営が三郎右衛門へ任されていたことを示していると思われる。喜兵衛の権利は、「山先歩之義出金、不拘銀鉛出高十分ノ一無相違時々相渡可申事」と定められた。百姓茂市によって見立てられた六助沢の銀鉛鉱山でも、金主の上州邑楽郡梅原村直七と茂市の間に、同様の取り決めが為された。「歩合之事出金、不拘山々出高十分一其時々急度相渡可申事」²⁸⁾。すなわち、喜兵衛も茂市も、稼行を金主に任せ、自らは経営を離れ、山先人として出鉱高の10%にあたる権利金(山先分一、または歩一)を得るのみの立場になったのであった。

2) 鉛商人の進出と鉱山会所の設立

鉱山の問掘を行った結果、銀などが産出された場合には幕府に届け出ることが義務づけられていたのに対して、鉛の場合は一定の運上を上納すれば、自由に売買することが認められていた。文政8年(1825)の間掘で出鉱した鉛鉱石は、江戸小伝馬町の金物問屋、中嶋屋源七に売り渡された。天

保10年(1839)6月のひら平の間掘の際に金主となった、江戸通油町の鉛問屋炭屋平兵衛・江戸日本橋品川町裏河岸伊勢屋平作は、当初は鉛石を買い請けることを目的としており、「買金主」と呼ばれた。やがて、これらの鉛を扱う商人が直接鉛山経営に携わるようになってきた。炭屋平兵衛と伊勢屋平作、そして弘化2年(1845)4月に狩掛沢鉛山の金主となった上野国佐野天明町正田利右衛門と喜平治が最も積極的に鉛山の開発を行った。

弘化2年12月には、喜兵衛と金主たちとの間に新たに次のような議定が交わされた。

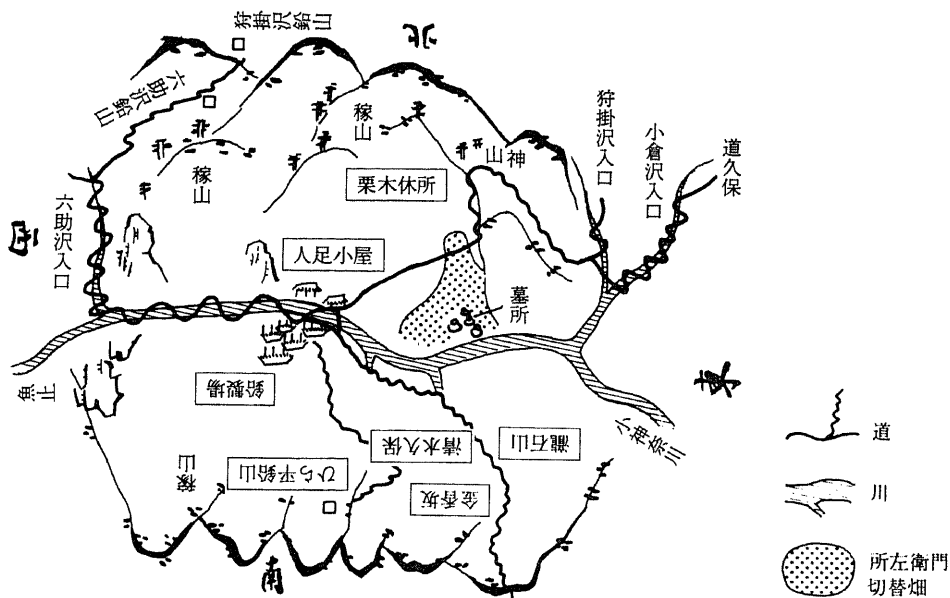
貴殿御村地内鉛山字飛ら平・六助沢・狩掛沢三ヶ所之義は先達村方示談行届候付、稼方之義一旦休山を喜兵衛殿引請相成候趣付、御運上之老割引而山先歩一三ヶ山分喜兵衛殿相渡可申候事

従来の喜兵衛の出願による鉛山は一旦休山とされ、金主達から改めて役所へ願書が提出された。また、喜兵衛への配分は、運上から10%を引いた

額と定められた。

こうして鉛山関係の実質的な権利はすべて鉛問屋へ移譲され、翌弘化3年には金主3名から本稼が出願され、弘化4年から5年季で鉛山が稼行されることになった²⁹⁾。ひら平、六助沢、狩掛沢のそれぞれの鉛山に会所が設立された。「鉛山記録」に、嘉永2年(1849)には「狩懸沢・六助沢、鉛大直り之事」、嘉永4年には「今年狩掛大直り、中二茂八月・九月、一日三竈宛吹一竈代金五拾両也、一月入残二竈一日百両金殖分月三千両之利徳也」と記されているように、大量に鉛を出産した。

第6図は嘉永5年に、字ひら平の範囲について役所に上申した際に添えられた絵図面を模写したものである³⁰⁾。ひら平、六助沢、狩掛沢の各鉛山の位置が示されている。ひら平鉛山への登り口に、小神流川を挟んで鉛製場と人足小屋が設置されていたことがわかる。鉛山の稼行は金主配下の稼人に委ねられていた。当時のひら平の稼行を行ったのは、武州多摩郡下海沢村長左衛門であった。



第6図 ひら平鉛山付近絵図(嘉永5年)

(幸島敬一氏所蔵「嘉永五年中津川村鉛山絵図」より作成)

「秩父日記」³¹⁾には、嘉永6年頃の狩掛沢について、赤岩川沿いに板屋が立ち並び、女子が鉛鉱石と土を選別している様子、男子が篠竹を束ねて灯火とし、坑道に入って鉱石を堀出している様子が描かれ、村からあふれた者たちが集まって来たと記されている。炭竈が煙を立ち上らせている情景から、ここで炭焼きが行われていたこともわかる。「鉛山記録」にはこの頃に狩掛沢に鉛製場が建てられていたことを示す記述がある。そこで使用される炭が生産されていたものであろう。

また、「秩父日記」には、河原沢村の坂本という集落には宿屋や「物うき屋」があり、ここで小鹿野から馬によって運ばれた物資と、中津川から徒歩で運ばれて来た鉛を交換したことが記されている。中津川村の小倉沢を通り、八丁峠を越えて坂本に到る山道は三山道と呼ばれていた。従来、中津川村では物資の輸送には白井差を越えて小森川沿いを通る道が多く利用されてきた。しかし小森川は谷が狭小であり、道は谷から数10メートル上方の山道であったので、物資の運搬は人力によらねばならなかった。三山道を利用して赤平川の谷に到れば、後は馬による輸送が可能であったため、鉛鉱石の運搬にはこの道が利用された³²⁾。

3) 鉛鉱山の稼行による村内秩序の変化

鉛鉱山の大規模な稼行は、村の経済や社会秩序に大きな影響を与えた。そのひとつとして、村が鉱山会所から多くの金銭を得ることになったことがあげられる。「百姓稼山」の利用に賦課される山役銭、永2貫516文を鉱山が負担した。この他、鉱山稼行に必要な小屋掛木、焼木、炭薪木代として1ヶ山ごとに金3両、埴土代として1ヶ山ごとに金2分、さらに小屋場代として1ヶ山ごとに金2分が、鉱山から村民へ1ヶ年ごとに支払われた。これらを合計すると、年間にして金12両となった。

またこの時期には、村民が鉱山会所に直接雇用され、賃銭稼ぎに従事するようになった。この事実については、次の事件から知ることができる。嘉永5年(1852)、名主所左衛門(幸嶋家)と小前百

姓との間に生じていた争論の末に、喜兵衛が鉱山会所に対して、村中の小前百姓を人足として雇用しないように要請した。この結果、稼ぎを失った村民が困惑して役所へ訴え出た³³⁾。具体的な金額を知ることはできないが、稼ぎの内容は次のようなものであった。成年男子は薪炭用地として鉱山へ貸与していた山において、薪炭用の木を伐り出し、賃銭を得ていた。そして婦女子は坑内で使用する「寿々(すす)竹」を売った。

弘化2年(1846)には、鉱山からもたらされる権利金をめぐって、次のような争論が起こった。この年の7月に、小前百姓から喜兵衛を相手取り、役所へ出訴があった。「鉛山記録」では内容を詳かに記していないが、この出訴に対して、喜兵衛が古書類を用意して、これまで村方に分一、地代など割渡した先例はなかったこと、鉱山の請負人が山先へ分一を支払うという慣例に対して、これまで問題は生じていなかったことなどを主張していることから、小前百姓は、村方に山先分一を還元するべきであることを主張して、訴訟を起こしたことがわかる。

役所は喜兵衛の主張を概ね認めたが、鉱山開発に悪影響が及ぶことにならぬよう、村方へもなんらかの利益があるように取り計らうよう判決を下した。喜兵衛はこれに対して、今回山先分一の村への支払いを認めてしまえば、村の秩序が乱れることを主張して、追訴を行い抵抗したが、この年の12月に、鉱山会所から村に対して差し出された議定証文において、村方へ「助成歩一」という名目で利潤が分配されることが定められたところを見ると、小前百姓の主張が認められたようである。また、この議定証文では、運上の上納に組頭、百姓代も立ち会うことも定められ、宛先にもこれまでの村役人に加えて、小前惣代の名が添えられるようになった。

このように村中の小前百姓が団結して名主に對抗する事態は、これまでにはみられないことであった。このことから、鉛鉱山から中津川村に落とされた多くの金銭と、鉱山会所による雇用が、小前百姓の経済的な自立、ひいては村内の秩序の変

化を促したことが推測される。

V おわりに

本稿では、鉾山を持つ村であった近世期中津川村がどのように集落を形成、維持し、地内で行われた鉾山開発と関わってきたかを明らかにすることを目的として、検討を進めてきた。この結果は以下のようにまとめることができる。

少なくとも中世期には中津川村地内において採鉾が行われ、近世期中津川村は、幸嶋家や逸見家のような、鉾山業に関わった人々が中心となって形成された集落であったことが推測される。しかし、慶長期に字「桃の久保」の短期間の盛山を経た後、鉾山業は衰微した。

その後の中津川集落は、中津川沿いの南向き斜面に立地した集落の周囲に分布する僅かな耕地と、広大な「百姓稼山」を利用して生計をたてる集落となった。最も上質な耕地が中畑であり、下々畑が多くを占めていたことから、耕地の生産性は低かったと考えられる。しかも、耕地の多くは、世襲名主の幸嶋家と逸見家によって占められていた。従って、中津川村を支えたのは、村の入会地である「百姓稼山」であった。「百姓稼山」では、山林資源を利用した山稼ぎと、焼畑耕作などが行われた。「百姓稼山」の利用に対して賦課された年貢である「山役銭」は、村民が頭割りに負担した。また、「百姓稼山」の木品を売り渡した場合には、その代金は村民に平等に分配された。このように、共有地を紐帯として、中津川村の結び付きは強かったと考えられる。

正徳期に「桃の久保」の金山の復活が図られて以後、再び村内で鉾山開発が行われるようになった。幕府の積極的な鉾山開発の奨励を背景として、かつて大量に金を産出したと伝えられた「桃の久保」の再開発が試みられたのであった。正徳期から天明期までの鉾山開発はすべて村外の出身者によって進められた。天明期から文政期にかけて、これらの開発の影響を受けて、小神流川流域に次々と新鉾山が見立てられた。これらの開発にお

いては、秩父地域の出身者が開発の中心となった。中津川村でも、名主の2家と小前百姓の松四郎家が鉾山経営に関わった。

この時期の鉾山開発の痕跡は、集落景観には認められない。集落付近で行われたのが、「桃の久保」の復旧工事のみであり、他の開発は、小神流川流域で行われたためであろう。小神流川流域は「百姓稼山」内に含まれていたため、ここに産出する鉾物資源を利用する際には村の制約を受けた。松四郎の鉾山の例では、最初の間掘の期間は、鉾山の経営は松四郎の裁量に任されたが、継続稼行を出願する際には、村民連名で行うことが取り決められた。また、鉾山業に用いる用地や用木は、「百姓稼山」の域内において得られたので、これを鉾山に提供して得られた収入は、村民で均等に分配された。

天明期には山稼ぎの品目が増加し、規格も拡大された。また、小森・大瀧筋とは異なった新しい道筋が開かれ、従来とは異なった地域に山稼ぎ品が搬出されたと思われる。このような変化によって、小前百姓が経済力を持ち、鉾山開発に参加できるようになったと考えられる。

文政期頃になると、「桃の久保」の再開発事業は途絶し、小神流川流域の銀鉛鉾山の開発が鉾山開発の中心となった。この時期になると、他村の出身者である金主に経営が委ねられ、幸嶋家などの村民は鉾山の直接経営から離れ、「山先歩一」を得る立場となった。これまで経営にあたってきた村民の立場からすれば、経営に伴うリスクはなくなり、出鉾高に連動して収入が得られるようになった。金主の立場では、より自由な経営が可能となった。これによって、鉾山開発が本格的に行われる条件が整ったと考えられる。弘化・嘉永期頃には江戸や上州から鉛商人が入り込み、鉾山経営の全ての権利を得た。そして、ひら平・六助沢・狩掛沢の3ヶ所の鉛鉾山にそれぞれ鉾山会所が設けられた。

この結果、地代・用木代・歩一銭として、村に多くの権利金が落とされた。また、小前百姓は鉾山会所に直接雇用され、用木の伐採・運搬を行っ

て、賃銭を得た。この時期に、小前百姓が団結して名主に対抗するようになったことは、鉾山から村に落とされた金銭が、小前百姓の経済的自立を進めたのではないと思われる。

以上にみてきたように、中津川集落の形成に関わったとも考えられる「桃の久保」金山が衰微した後、「百姓稼山」が中津川村民の生活の基盤となった。また、天明期以降には「百姓稼山」が中津川村における鉾山開発の舞台となった。このため、鉾山開発は、その時期ごとの「百姓稼山」のあり方を常に反映していたと考えられる。この実態をさらに明らかにするためには、中津川村の集落の構造、とりわけ「百姓稼山」に関する共同体的な組織について検討する必要がある。さらに、明治期以降の鉾山業の展開についても分析し、これと「百姓稼山」の解体過程との関連について検討することも必要とされる。

付 記

現地調査に際しては、大滝村中津川地区の方々に温かい御助力をいただきました。幸島敬一、山中梅次両氏には貴重な史料を閲覧させていただきました。御多忙中にも関わらず、大滝村役場の方々や両神村役場の高橋稔氏には、資料収集の便宜を図っていただきました。また、立教大学大学院の富岡政治氏には貴重な御助言を頂きました。なお、筑波大学比較文化学類の近藤佳美、人文学類の江尻大介の両氏には、平成2年度の歴史地理学実習において、調査の労を共にしていただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

注

- 1) 現在の小倉沢集落は、昭和12年(1937)の日室鉾業による鉾山経営に際して成立した集落である。
- 2) 今井秀喜(1973):『日本地方鉾床誌・関東地方』, 朝倉書店, pp. 89~102.
- 3) 大滝村中津川幸島敬一氏所蔵。元久2年(1205)の幸嶋覚範入道の土着から、嘉永6年(1853)の鉛鉾山の不振までの記述がある。しかし、詳細な記述は1825年(文政8年)以降の銀鉛山開発に関することに限られ、それ以前の記述は伝説や他の記録に

よるものと思われる。「鉛山記録」の前半部分の原型になったと考えられるものに、「中津川村金山初旧記」(大滝村誌資料調査委員会編(1987):『大滝村誌』資料編11, 58~60所収)がある。なお、「鉛山記録」は、大滝村誌資料調査委員会編(1987):『大滝村誌』資料編11, および大滝村教育委員会他編(1985):「大滝村の文化財資料(6)」に、「鉾山記録」として収載されている。また、埼玉県(1990):『新編埼玉県史・資料編16 近世7 産業』にも「鉾山記録」の表題で収載されている。

- 4) 田中圭一(1986):『佐渡金銀山の史的研究』, 刀水書房, 3ページ.
- 5) 小葉田淳(1973):『日本鉾山史の研究』, 308ページ.
- 6) 逸見家墓所の供養塔の碑文に「清和8代孫甲斐源氏新羅三郎義光ヨリ17代孫民部小輔昌達二男重郎の信行天文13年中津土着」とある。
- 7) 例えば、『新編武蔵風土記稿』に、薄村小沢口の逸見太四郎の先祖、逸見若狭守は武田氏の重臣であったと記載されている。
- 8) 引用文中に、「砂金」とあるが、坑道掘りの場合でも、低品位の金鉾石を砂金と称した。
- 9) 近世期中津川村には中津川とその分郷である中双里の2集落があったが、Ⅱ章1節に述べたような鉾山業と関連があると考えられるのは、中津川集落であるので、ここでは、中津川集落のみを対象とし、中双里集落は扱わない。
- 10) 大滝村中津川山中梅次氏所蔵「中津川村検地水帳」。この水帳は名寄形式にまとめられており、成立年代は不明である。中津川村の検地が行われたのは、元禄10年(1697)であるが、この水帳には名主や代官の署名・捺印などが無いことから、その当時のものではなく、後の時代の写しであろうと考えられる。
- 11) 中津川村において、上木畑にどのような作物が植えられたかについては明らかではない。近世の上小鹿野村では、桑が植えられていたことが明らかとなっている。中津川村の上木畑や上木の年貢が課された畑は、桑の生育に適した川沿いに多くあることから、中津川村でも、桑が植えられていたであろうと考えられる。『新編武蔵風土記稿』によれば、近世期中津川では紙が生産されていたことが明らかである。この原料の楮が植えられていたことも考えられる。
- 12) 「嘉永6年村方様子書上帳」には「百姓持林」として字名・所有者・面積を書き出し、「右之所下々畑之高請地二御座候処、地味甚悪敷作物不出来ニ付、捨置候処、自然生松栗有之候…」と説明を加えている。

- 13) 幸島敬一氏所蔵「中津川御山内之儀ニ付被仰渡候趣御請書覚」(享保18年)『大滝村誌』資料編11, 66~67.所載。山中梅次氏もこの写と思われる文書を所蔵する。
- 14) 大滝村大滝千島英郎氏所蔵「新古大瀧村中津川村入会大滑小滑両谷山代金割合覚帳控」(寛政6年), 『大滝村誌』資料編8, 437~439所載によれば, 3ヶ村入会山である大滑小滑両谷の山代金として受け取った70両を3ヶ村で分配した際に中津川村には, 30軒分として5両2分が分配された。
- 15) 幸島敬一氏所蔵「差出申連判證文之事」(寛保3年)『大滝村誌』資料編11, 297ページ所載。
- 16) 日本学士院編(1982):『明治前日本鉱山技術発達史』, 臨川書店, 207~222。
- 17) 中島秀亀智(1981):『平賀源内と中島利兵衛』, さきたま出版会, 119~166。
- 18) 城福勇(1971):『平賀源内』, 吉川弘文館, 112~113。
- 19) 山中梅次氏所蔵(寛政2年)。
- 20) 山中梅次氏所蔵「銀鉛山御用留」(文政3年), 「乍恐以書付奉願上候」(文政11年), 「為取替議定證文之事」(文政11年)。
- 21) 幸島敬一氏所蔵。この絵図に描写してあるのは, 集落付近のみである。中津川集落と中双里集落との間, 中津川集落と字「大冠」の下々畑との間の距離は実際よりも著しく短く描かれている。
- 22) 幸島敬一氏所蔵「寛政13年村方百姓高之差」『大滝村誌』資料編11, 56~57所載による。また, 山中梅次氏所蔵「畑方分地帳」(文化2年)によれば, 寛政3年(1791)に松四郎と久四郎兄弟が, 父親の彦市の持高3斗5升を均分相続したことがわかる。
- 23) 山中梅次氏所蔵「為取替申一札之事」(天明2年), 「差上申済口證文之事」(天明2年)。
- 24) 幸島敬一氏所蔵「山稼品増願請書写」(天明6年)『大滝村誌』資料編11, 68~69所載。
- 25) 幸島敬一氏所蔵「議定證文之事」(寛政6年)『大滝村誌』資料編11, 70~71所載。
- 26) 山中梅次氏所蔵「差上申済口證文之事」(文化10年)。
- 27) 文政8年(1825)から同10年までの稼行のあと, ひら平銀鉛山には複数の金主から稼行の希望があった。最終的には幸嶋喜兵衛の指名によって金主が決定されたが, その根拠は「職人茂大勢召連物毎辨利ニ付」と「鉛山記録」に記されている。このように, 金主は職人集団に配下に組織していた。
- 28) 前掲20), 「為取替議定證文之事」。
- 29) 山中梅次氏所蔵「差上申御請書之事」(弘化4年)。
- 30) 幸島敬一氏所蔵。『大滝村誌』資料編11の口絵にこの絵図の写真が載せられている。
- 31) 渡辺渉園著「秩父日記」嘉永6頃成立。千島寿訳(1984):『秩父日記』, 埼玉県立浦和図書館, を参考にした。
- 32) 鉱山会所の設置以降, 小森筋の道の利用が減り, 賃金稼ぎができなくなったため, 小森村の名主が中津川村役人に不服を申し立てている。このことから, 一般の荷物の運送も三山道を利用して行われるようになったことがわかる。『大滝村誌』資料編11, 299~300参照。
- 33) 山中梅次氏所蔵「乍恐以書付奉願上候」(嘉永5年)。